13日　火曜

民数

22:15 バラクはもう一度、先の者たちよりも大勢の、しかも位の高い長たちを遣わした。
22:16 彼らはバラムのところに来て彼に言った。「ツィポルの子バラクはこう申しました。『どうか私のところに来るのを断らないでください。
22:17 私はあなたを手厚くもてなします。また、あなたが私に言いつけられることは何でもします。どうか来て、私のためにこの民に呪いをかけてください。』」
22:18 しかし、バラムはバラクの家臣たちに答えた。「たとえバラクが銀や金で満ちた彼の家をくれても、私は私の神、【主】の命を破ることは、事の大小にかかわらず、断じてできません。
22:19 ですから、あなたがたもまた、今晩ここにとどまりなさい。【主】が私に何かほかのことをお告げくださるかどうか、確かめましょう。」
22:20 夜、神はバラムのところに来て、彼に言われた。「この者たちがあなたを招きに来たのなら、立って彼らと一緒に行け。だが、あなたはただ、わたしがあなたに告げることだけを行え。」
22:21 バラムは朝起きて、自分のろばに鞍をつけ、モアブの長たちと一緒に行った。
22:22 しかし、彼が行こうとすると、神の怒りが燃え上がり、【主】の使いが彼に敵対して道に立ちはだかった。バラムはろばに乗っていて、二人の若者がそばにいた。
22:23 ろばは、【主】の使いが抜き身の剣を手に持って、道に立ちはだかっているのを見た。ろばは道からそれて畑に入って行ったので、バラムはろばを打って道に戻そうとした。
22:24 すると【主】の使いは、両側に石垣のある、ぶどう畑の間の狭い道に立った。
22:25 ろばは【主】の使いを見て、石垣にからだを押しつけ、バラムの足を石垣に押しつけたので、バラムはさらにろばを打った。
22:26 【主】の使いはさらに進んで行って、狭くて、右にも左にもよける余地のない場所に立った。
22:27 ろばは【主】の使いを見て、バラムを乗せたまま、うずくまってしまった。バラムは怒りを燃やし、杖でろばを打った。
22:28 すると、【主】がろばの口を開かれたので、ろばはバラムに言った。「私があなたに何をしたというのですか。私を三度も打つとは。」
22:29 バラムはろばに言った。「おまえが私をばかにしたからだ。もし私の手に剣があれば、今、おまえを殺してしまうところだ。」
22:30 ろばはバラムに言った。「私は、あなたが今日この日までずっと乗ってこられた、あなたのろばではありませんか。私がかつて、あなたにこのようなことをしたことがあったでしょうか。」バラムは答えた。「いや、なかった。」

「金銀」には目もくれずに一度は断ったバラムでしたが、「何かほかのこと…」がないかどうかと、バラク王からの使いを留めさせてしまいました。結局金銀を捨てきれなかったのです。
神様は「彼らととも行け」と言われましたが、それはご自身の怒りをバラムに表わすためでした。主はロバが話すようにして、バラムに語りかけてそれが主であることを明かにしつつ、バラムの欲に目がくらんだ心を指摘なさったのです。
信仰によって歩もうとするなら、金銀などの利害に未練を残してはなりません。主が与え主が取られるからです。主の御心をまっすぐに行いましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？